

未来に向かって伸びる鶴嶺の子 鶴小だより 12月号

真実はいつもひとつ？！

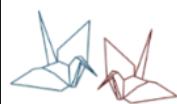
「真実は、いつもひとつ！！」人気テレビアニメ「名探偵コナン」のコナン君の決め台詞です。ご存じの方も多いと思います。しかし、学校での子どもたちを見ている僕は、本当かな？！と思う面が正直あります。どうしてだと思いますか。

実は、子どもたちの話を聞いていると、ときに「本当とうその間」みたいな発言があります。特に、子どもたち同士のトラブル等では、「同じ事柄」についてではあっても、子どもたちが言う「真実」が違ってくることがあるのです。子どもの感情が反映したり、完全に事実誤認してしまっていたりするケースもあります。意図して、嘘をついていなくとも、それぞれの「真実」にズレが生じることがままあるのです。

それでは、子どものすれ違いの一例を見てみましょう。Aさんはただ歩いていました。そこに後ろからBさんが小走りで来て、たまたまAさんの後ろで転んだ時、Aさんに手で強くぶつかってしまいました。Bさんは、Aさんにぶつかったおかげで転ばずにすみ、Aさんが倒れて振り返ったとき、Bさんが後ろに立っているという状況だったとしましょう。Aさんは、何にもしていないのにBさんに叩かれたとか、強く押されたとか言うでしょう。誰かが見ていて、仲裁してくれればよいけれど、そうでなければ、それぞれが捉えた「真実」は別のものになってしまいます。仲のよい2人なら、話せばすぐ誤解がとけるとと思いますが、何かにつけぶつかっている2人なら、AさんはBさんの話を全く受け入れられないかもしれません。そうして、2つの「真実」が生まれることとなります。しかし、Aさんはうそを言っている訳では決していないですよ。そう感じそう捉えているに過ぎません。状況は様々ですが、子ども同士のやりとりの中では、こういった捉えの違いが結構あることを、まず知っておいてほしいと思います。

かくして、見ていた子どももおらず、この場で解決できずにお家に帰ると、今日嫌だったこととしてAさんは親御さんにこの事を伝えるでしょう。それを聞いた親御さんはどう思うでしょうか。うちの子は何にもしていないのにどうということだろう。この間も同じようなことがあったはずだと、以前のことまで思い出して、相手の子どもやその親御さんにネガティブな感情を抱くこととなります。Aさんの親御さん中での「真実」は、Aさんが話した内容です。当然、心配や不安からもややもした気持ちを抱えることとなります。そのもやも

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長 日高 大司郎
令和7年12月1日発行



やする気持ちを上手に抱えられればよいですが、そうでなければ、以前から何度もトラブルが続いていた相手だったこともあり、相手の保護者と話したいなんて思ってしまうかもしれません。でもこれ、上手くいえますか。Bさんが話したことが「真実」と捉えているBさんの親御さんは、Aさんの話に納得いくわけがありません。そうです。2つの「真実」の中で話しても絶対上手くいえないのです。

こういったトラブルがあったとき、学校はなるべく客観的な「真実」を確認しようと努力します。しかし、この例のように明らかにならないことも多いのです。また、学校は子どもの指導のために「真実」を確認をするのであって、どちらが悪い等をジャッジするためにそうするわけではありません。明らかにしなければならぬなりに、子どもたちからしっかり聞きとって最大限それぞれが納得のいく解決を目指していきます。

ここで、皆さんに知っておいてほしいことは、**学校が確認できた「真実」でお考えいただきたい**ということです。お子さんを疑ってかかれと言うつもりは毛頭ありません。しかし、上述したようなケースもあれば、相手に対する感情で決めつけているケース、それから、お家の方には自分の悪さを隠すために自分のしたことは過小評価して、やられた事を過大に伝えるケースまであります。また、普段からお子さんとながれていないと、自分が被害者になった虚偽の話をする場合もあります。そうすると、親御さんが自分に振り向いてくれるからです。

最後に、こういったときのお家の方の役割をはっきりさせておきましょう。①まずは、嫌なことがあった子どもの話をしっかりと聴き、寄り添い共感することです。こうすることは、彼らの感情を立て直すこととなります。「安心感の輪」下半分です。②次に、子ども自らどうするか、どのようにして解決するかを決めて実行するのを支え、見守ることです。間違っても子どもがすべきことを横取りしないでください。お家の方がその事柄を重く受け止めすぎず、大丈夫よとどっしり構えておくことも大切です。ここは、「安心感の輪」の上半分、子どもに任せられるようにしましょう。

もしも、お子さんに起こったことで心が波立ってしまい苦しくなってしまうような方がいらしたら、そういう時は自分がつながれている「誰か」に黙って話を聞いてもらったり、一緒に何かをしたりするだけで随分楽になるはずです。大人も自分の「安心感の輪」を回す必要があるのです。